

令和元年6月27日現在

機関番号：32402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02648

研究課題名(和文)日本語表現に即したビジュアル・リテラシーの開発 日本語教育を手始めとして

研究課題名(英文)Development of visual literacy-Starting Japanese language education

研究代表者

岡本 能里子 (Okamoto, Noriko)

東京国際大学・国際関係学部・教授

研究者番号：20275811

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：新聞、広告、公共サインにおける4種類の表記方法や、縦書きと横書きの併用による、意味構築状況を国内外の学会で発表した。

また、LINEのスタンプを中心とした日本語母語話者同士と日本語母語話者と非母語話者同士のビジュアルコミュニケーションを分析し、日本語表現特有のビジュアル・リテラシーを解明を目指した。そこに埋め込まれた日本文化を反映した複数表記による意味構築のあり方について、今後の研究に向けた示唆を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語表現に即したビジュアル・リテラシー育成を目指し、多文化多言語を背景にもつ児童の日本語教育への応用の基盤作りを行った。その成果を、国語教育、外国語教育を含めた言語教育に「見る=ビューイング」を取り入れる意義とビジュアル・リテラシーの重要性を、言語政策的な提言を目指して探求した。日本の少子高齢化の進行は、加速している。2019年4月の改定入管法施行に続き、今期国会で「日本語教育推進法」が超党派で可決される見通した。今後確実に多文化社会へと進む日本の言語教育に、4技能に加え、移民受け入れ先進国でもある英国、カナダ、豪州が実施している「ビューイング」教育を取入れる必要性を伝えることができた。

研究成果の概要(英文)：We presented the state of meaning construction at national and international conferences by using four different writing methods in newspapers, advertisements, and public signs, and by combining vertical writing and horizontal writing.

In addition, we analyzed visual communication centered on LINE stamps and aimed to clarify the visual literacy unique to Japanese expressions.

As for the way of constructing the meaning by multiple notation reflecting the Japanese culture embedded there, I got suggestions for future research.

研究分野：日本語教育 社会言語学 異文化理解教育

キーワード：ビューイング カリキュラム 言語政策 教授法 日本語教育

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

少子高齢化に突き進む日本社会において、外国人の受入れは移民政策を考えて行く上で喫緊の課題である。前B科研においては、メディア研究および移民受入れ先進国である、イギリス、オーストラリア、カナダで導入されてきた言語教育の4技能(書く、読む、話す、聞く)に加えた5技能目である「見る=ビューイング」の導入の必要性について、英語、国語、日本語教育の連携を通して研究した。本科研では、その成果をふまえ、日本語教育に焦点化し、外国籍児童生徒が増加の一途を辿っている小中学校を中心に、教科書や日本語非母語児童生徒のための日本語教育教材などにおけるビジュアル要素に注目して分析し、日本の学校教育文化に埋め込まれたビジュアル・リテラシーの解明を試みる。それをもとに、日本語教育に「見る=ビューイング」を導入することの必要性の調査を行い、具体的な言語政策提言として学会で発信していく。更に、現場で使用できるビジュアル・リテラシー育成のための具体的な日本語教育教材作成に着手することを目指す。

### 2. 研究の目的

本研究では、日本語教育現場をフィールドとして、ビジュアル・リテラシーの普遍的な構造を十分に踏まえた上で、日本語表現に即したビジュアル・リテラシーの開発を目指す。

4種類の表記方法や、縦書きと横書きの併用など、日本語表現特有のビジュアル・リテラシーを解明し、その成果をカリキュラムに導入することによって、年少者を含めた日本語教育全般に寄与するとともに、ビジュアル・リテラシーの国際的研究水準の向上にも資することを目指す。

絵本と電子書籍や教科書などをビジュアル・リテラシーの観点から分析し、年少者日本語教育への適用を提起する。また、日本語教育だけでなく、未だに4技能の育成を目指している日本の英語教育を含めた外国語教育におけるビジュアル・リテラシーの重要性を明らかにし、言語政策的な提言としてまとめる。

### 3. 研究の方法

以下の2つの課題の探究を中心とし、他の課題はそれらの探究との関連でその都度進めていく。

- (1) 年少者言語教育におけるビジュアル・リテラシー教育の有効性の実証
  - (ア) 英語圏におけるビューイング理論とカリキュラム、教材の理論的・実践的研究
  - (イ) 日本の年少者言語教育の現場の実態調査
  - (ウ) 日本の年少者言語教育の現場で、教材を使用した実践とその成果測定
- (2) 日本語表現に即したビジュアル・リテラシーの解明
  - (ア) 申請者のこの領域における、これまでの成果の集約
  - (イ) ビジュアル・リテラシー関係の国際大会での研究発表及び訪問による海外研究者との交流
  - (ウ) 日本語表現特有のビジュアル・リテラシーの解明と、その教材の開発

### 4. 研究成果

(1) 新聞、広告、公共サインにおける4種類の表記方法や、縦書きと横書きの併用による意味構築状況を国内外の学会で発表した。

(2) LINEのスタンプを中心とした日本語母語話者同士と日本語母語話者と非母語話者同士のビジュアルコミュニケーションを分析し、日本語表現特有のビジュアル・リテラシーの解明を目指した。

(3) (2)に埋め込まれた日本文化を反映した複数表記による意味構築のあり方について、今後の研究に向けた示唆を得た。

(4) 小中学校の教科書の挿絵やイラストの分析と、外国籍児童生徒や帰国子女が困難を感じているビジュアル要素があることがわかってきた。

(5) これらの成果をもとに「学びほぐし=アンラーニング」の観点から、新しい日本語教育への還元を目指した教材作成をスタートさせた。

(6) (5)を、外国語教育の新たな「学びほぐし=アンラーニング」への提案を行う視座を得ることができ、その論文を今年中に刊行予定である。

### 5. 主な発表論文等

#### [雑誌論文](計 2 件)

佐藤彰、秦かおり、榎本剛士、岡本能里子、泉谷律子、木場安莉沙、震災報道を通して伝えられる日本-メディアが構築する「冷静」で「秩序を守る」日本人-、「相互行為研究-談話とイデオロギー」言語文化共同研究プロジェクト2017、査読有、1巻、2018、29-38

岩田祐子, 金庚芬, 楊虹, 白井宏美、省略員数 59 名、51 番目 岡本能里子、ルート・ヴ  
ォダック、ミヒャエル・マイヤー（編著）野呂香代子（監訳）「批判的談話分析入門-クリ  
ティカル・ディスコース・アナリシスの方法-」三元社、2010、社会言語科学、査読有、21  
巻、2018、392-396、DOI: <https://doi.org/10.19024/jajls.21.1.392>

〔学会発表〕(計 7 件)

横田和子、岡本能里子、佐藤仁美、當銘美菜、情動レベルに働きかける市民性教育の実践  
に向けて-ことば・からだ・アートを融合させた難民問題へのアプローチ、言語文化教育  
研究学会 第 5 回年次大会、2019

宇佐美洋, 文野峯子, 森本郁代, 岡本能里子, 柳田直美、演じること」への参加はどのよ  
うな学びをもたらすか: 「フォーラム・シアター」参加者の語りから、言語文化教育研究  
学会 第 5 回年次大会、2019

岡本能里子、服部圭子、LINE コミュニケーション-文字を伴ったスタンプに注目して-、  
社会言語科学会 第 43 回大会、2019

岡本能里子、森本郁代、柳田直美、村田和代、外国人受け入れ側のコミュニケーション課  
題-選ばれる国を目指して-、日本語教育学会 春季大会、2019

岡本能里子、平高史也、村田和代、岩田一成、外国人受け入れに向けた学校、企業、公共  
サービスの課題-国内外の受け入れ側の研修プログラムを通して考える、日本言語政策学会  
第 21 回研究大会、2019

岡本能里子、武山良三、岩田一成、本田弘之、公共サインの言語政策: 言語計画はどこで  
行われているのか、日本言語政策学会 第 20 回記念研究大会、2018

八木真奈美、岡本能里子、古屋憲章、「語り」の持つ力と可能性を教育実践に活かす試み  
-ナラティブをもとにしたリソース教材の開発-、日本語教育学会 秋季大会、2018

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年:  
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

(2)研究協力者

研究協力者氏名：門倉 正美、服部 久美子、奥泉 香、矢部 まゆみ、永井 雅子

ローマ字氏名：( KADOKURA, masami ) ,(HATTORI, kumiko),(OKUIZUMI, kaori),(YABE, mayumi),(NAGAI, masako)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。